

〈スピ・シン主義〉の思想的位置

伊田 広行

要旨

〈スピ・シン主義〉は、ポストモダンおよびホリスティック論の統合の位置、近代合理主義と宗教・新靈性運動の両者の積極面を総合化した位置にある。思想地図上では、シングル単位度とスピリチュアル度の2指標において両方とも高い位置にあるものである。旧型の保守・革新は、この地図上では〈スピ・シン主義〉の対極に近いところに位置する。思想的特長としては、客観主義ではなく、立場を選択したある種のイデオロギーである。新靈性運動やディープエコロジー論が、社会性や現体制変革の具体性をもっていない点を批判して、シングル単位を強調したものである。またアナーキズムに基盤をもっていると同時に、誰かの犠牲の上に多数派の価値を優先するという現実主義を批判するような理想追求的な性質をもっている。政治的には、新自由主義、近代主義的社会民主主義、宗教的保守主義、近代化国家（途上国の資本主義化）、市場依存型（西欧現実）路線、新靈性運動的政治などと異なる、ポストモダン型の社会民主主義の路線である。

目次

- 1 〈スピ・シン主義〉の思想地図
 - 脱・構築（ポストモダン）および再・構築（ホリスティック）の統合としての「シングル単位論」
 - 「シングル単位論」の射程領域の多重性
 - 〈スピ・シン主義〉の簡単な位置関係
 - 保革近代主義思想から「シングル単位論」へ
 - 詳しい思想地図の2つの座標
 - 〈スピ・シン主義〉を理解するための日本思想地図
- 2 〈スピ・シン主義〉の思想的特徴
 - ニヒリズム、ポストモダニズム
 - 立場の選択、近代の徹底
 - 宗教的精神性の尊重、イデオロギー、文化多元主義
 - オドー主義、アナーキズム
 - 〈スピリチュアリティ〉という幻想

- 思想潮流：ポストモダンと宗教と新霊性運動と合理主義
 現代思想に客観主義で臨んでいいものか
 新霊性運動の本質把握には社会改革との関係が重要
 ディープ・エコロジーなどへの批判を踏まえる
- 3 オメラスから歩みさる〈スピ・シン主義〉
 政治的な位置
 近代主義的政治
 ポストモダニズム的政治
 オメラスから歩み去るか否か
 社会基盤の変化の反映
 システムの変化を目指すもの
 〈スピリチュアリティ〉を大事にする運動へ
 論理偏重がいけないのか
 なぜ人を殺してはいけないのか

キーワード 思想地図、アナーキズム、文化多元主義、4つの思想潮流、
 ディープ・エコロジー、オメラス

はじめに

〈スピ・シン主義〉がどういうものかをわかりやすく伝える一つの方法が、日本の思想地図の中で、「シングル単位論」および〈スピ・シン主義〉がどの位置にあるかをみることである。こういうものは、理屈っぽいので不要な人もいるだろうが、これによって、他の思想・政治潮流との距離感や近さがわかって、自分の感覚との距離を調整できる人も多いと思われるので、整理しておきたい。

1 〈スピ・シン主義〉の思想地図

脱・構築（ポストモダン）および再・構築（ホリスティック）の統合としての「シングル単位論」

まず、私たちがポストモダン水準で議論をすすめるべきは当然である。そのとき、私たちが簡単に現存パラダイム（発想の枠組み）の外にたつことができないなかで、旧パラダイムから脱して、新しいパラダイムをどのように構想できるのか、という問題がある。ホリスティック派（拙著[2003]p83）である吉田敦彦氏は、これに関して次のように答える。

「自分の発想を規定している支配的なパラダイムを反省し、それを相対化して距離をとれるように徹底して批判的に分析する脱・構築の営みが必要になる。これが不徹底なまま新たなパラダイムを再・構築しようとする、結局は旧パラダイムに囲い込まれ、吸収されてしまう。」「新たなパラダイムへの転換が、現に支配的なパラダイムから脱しようとするこのような困難な格闘（「文化闘争」）を経ずして生起するかのような言説への警鐘」（吉田[1999] p222）が重要なのである、と。

これを例えばジェンダー平等の議論に適用するならば、すなわち私たちに必要なのは、現在の家族単位的性別秩序を徹底的に相対化し、批判する脱・構築の文化闘争的営みである。それが「シングル単位論」である。

しかも、脱・構築だけでは不十分である。拒みつづけ、破壊しつづけるだけでは、方向性も、エネルギーも失い、しばしば単なる「無為主義的な価値相対化論」に墮する（日本の1980年代の「ニューアカ」を想起しよう）。現在のパラダイムとの格闘は、何のために格闘するのか、何に痛みや怒りを感じ、何をどうしたいのかという直感・意欲、〈たましい〉と不可分であり、それに関したビジョンや創造的理念があるときに、より有効となるのであり、その意味で「再・構築」と補完しあうことが望ましい。そうであるからこそ、「シングル単位論」は、家族共同体主義の対極にあるものとして「シングル」概念をうちたてた。それは脱・構築概念であると同時に、再・構築の概念でもある。旧関係とは違うどのような関係を作りたいのかの直感的方向性を示す未来の平等社会の「雛形」であり「主体」概念なのである。

ここに吉田氏の議論を援用したように、実は「シングル単位論」はホリスティックな世界観と親和的である。しばしば「シングル単位論」は、その語感から、ただ家族を否定しばらばらでエゴイズムな「個人」に分解する論と誤解されるのであるが、各拙著をみていただければわかるように、自由、自立、自己決定、多様性を各人に保証するために、異質者たちの共存のための明示的ルール・制度作りを強調する、社会民主主義システム志向の論なのである。

私が、単位としての「シングル」をいうとき、それはもちろん「他者の抑圧の上に自分の利益を得るエゴイステックな個人」ではなく、ジェンダー・血縁・家族・民族などという近代主義的幻想を乗り越えて「深く他者とつながっていける出発点としての個人」を意味してきた。その上で、保守派の「魂」重視や新自由主義的・能力主義的な個人重視の論と対抗するためにも、その「つながり」（共生のルール）をどのレベルでみるかに注目して、本稿では狭い近代合理主義的な主客分離・客観主義を乗り越えて、自分の無意識部分まで含めた、直感的総合的認識、〈たましい〉のつながり

に光を当てて、「シングル単位論」を〈スピリチュアル・シングル主義〉として拡張している。

もちろん、安易な神秘主義や主観主義や宗教依存は問題外であるが、家族を批判するからといって、エゴな個人を絶対化するのも、市場原理をナイーブに信奉して後は自由競争に任すなどという楽観主義も愚かである。つまり、近代的価値至上主義も、その反動としての単純な反近代的非合理主義も排除しなければならない。その両方の一面性を自覚して、その二項対立の発想水準自体を超える第3の地平での「解決策」を求めてきた。そのとき、あまりに家族的価値への信奉が「運動側」も含めて強いために、原理的対極としての「個（シングル）」を強調したが、その意図するところは、そうした意味での家族・ジェンダーを超える“つながり”の単位としての「第3水準での個人」であった。そこまでみていくホリスティックな個を、私は「シングル」と呼んで希求してきたのである。

「シングル単位論」の射程領域の多重性

日本では、男女平等が議論される過程において、真のシングル単位改革に繋がるジェンダー論や福祉国家論が戦略的位置付けを得られてこなかった。この問題は、「日本の思想地図上の自覚されていない問題」にその根っこをもっている。そこでまず、「シングル単位論」の射程領域の多重性を確認しておこう。さまざまな水準・位相にわたる議論をすべて「シングル単位」というわかりやすい典型的一語でまとめたものであるが、それを分解すると以下のような各次元にわかれる。

- ① 短期的制度次元：短期的に、どのような具体的制度改革をするかの議論の次元、つまり社会保障や税制度や民法や労働・賃金システムなどの、世帯単位・夫婦単位・親子単位の制度（及び慣行）を、個人単位にするという制度的次元
- ② 中期政治次元：政治・経済・社会システム全体を北欧型の「社会民主主義的福祉国家」にしていくという中期的な政治戦略レベルの次元
- ③ 短期家庭内役割次元：家族内性分業・役割意識・血縁意識などをなくすという家庭領域における言動の次元
- ④ 長期生き方次元：夫婦・恋人間、親子間、友人間、その他あらゆる人間関係においての権力関係をなくすという生き方および社会全体の規範・道徳などを変えていく議論の次元、すなわち、近代家族幻想から解放された各人の生き方・考え方としてのポスト・モダンの生き方、近代の男女二分法超越の生き方の議論、人間ひとりひとりの質・水準の領域において、どのようなところに至ろうとするのかの議論の

次元

- ⑤ 中期思想次元：理論・思想上において、近代主義を乗り越えるポスト・モダン論の具体化の次元
- ⑥ 中期思想次元：人間の無意識の領域を重視して人権を論ずる、スピリチュアルな議論の次元
- ⑦ 中期運動論次元：社会変革運動の質をジェンダー平等を中心にした水準に変え、ジェンダー・フリー概念を一步進めるという運動論の次元

これらは相互に絡み合っているが、領域としても、時間的射程としても異なる。社会を本当に変革していくには、一部分の改革でなく、こうした多重領域全体の総合的変革が必要であると捉えて、私は「シングル単位」概念にこれらを詰め込み、蝶番的・接着剂的役割を与えた。したがって、「シングル単位論」を上記の①や②の一部に限定する議論と同一視するのは、誤読・無理解である。とくに、「シングル単位論」で、家族や恋愛といった領域の具体論を重視するのも、「いま・ここ」での私たちの生き方・関係自体に、未来の平等社会に通じる原型がなくてはならないと考えるからである。従来「運動・政治」においては、表層的「意識」か「制度」水準の議論に終始し、私たちを根底でとらえる「倫理や規範」を無意識のまま前提にして、そこを闘争・改革領域として重視せず放置していたと思う。

この「シングル単位」概念は、たしかに一種の「理念型」でしかない。そんなものが現実にあるというのではなく、希求する理念の寄せ集め概念だ。だが、それを打ち立てることによって、複雑で様々な現実を分析する物差しとなる。「家族単位 VS シングル単位」ということで、どれだけものが見えやすくなり、対案の方向性を指し示すことができることか。そのための概念なのである。

私がリブやフェミニズムや性的少数者の運動から学んだことは、フェミニズムを単なる旧型婦人解放論や女性の地位向上論のレベルからいかに引き上げるかであり、それが狭義の「女の問題」でなく、社会システムの根本変革の要としてのジェンダー・センシティブな戦略構想ということであった。それを私なりに翻訳・展開した概念が、社会民主主義的福祉国家への展開を端緒（基軸）に、意識・規範レベルまでのポストモダンの変革を求める戦略としての「シングル単位論」であった。

そこに、〈スピリチュアリティ〉を加えたものが、〈スピ・シン主義〉である。恋愛やセクシュアリティや家族まで含めた「シングル単位論」にすると、「実は混沌の闇世界のエロさもせつなさも含めるような〈スピリチュアリティ〉が希望だ」と明確に言うことによって、一部の「シングル単位論批判」（愛がない、バラバラ、寂しい）

に答えることができると思う。

〈スピ・シン主義〉の簡単な位置関係

この〈スピ・シン主義〉を従来の思想との関係でまず簡単に捉えるなら、図一1に示されるように、「近代合理主義と宗教的なもの、新靈性運動的なもの」との統合に位置するものといえる。そのどちらでもなく、両者の積極面を総合化したものである。〈たましい〉は、たんなる「精神的なもの」でもなければ、「神秘的、オカルト的」なものでもない。「精神的なもの」とは、身体と精神の二分法・分裂的把握の片方にすぎず、「神秘的、オカルト的」なものは、非科学的非合理的で金儲けに利用したり人権侵害に至るようなものにすぎない。

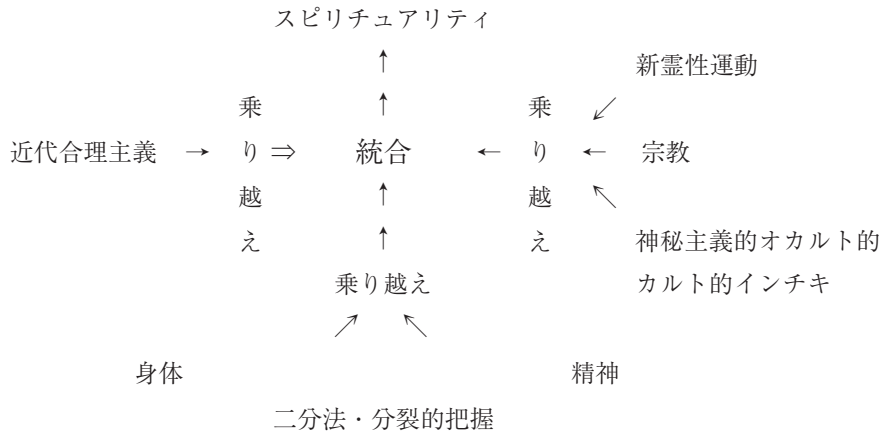
〈たましい〉の観点は、それとはまったく異なり、身体と精神の二分法自体を乗り越えるものである。能力主義的な合理主義に批判的になり、既存宗教やそれに類似したもののインチキ・現世利益主義を批判するレベルの心身統一の上での生き方・世界観である。〈たましい〉の観点は、近代社会と既成宗教の棲み分けを乗り越え、近代社会の限界を宗教の積極性を取り入れて突破しようとする試みといえる¹⁾。沈黙を尊び、長い時間軸空間軸で思考し、自然を大事にし、ゆったりした時間を大切に、死を意識し、自分の才能の偶然を自覚し、自分と地球全体との社会的つながりを意識するものである。

保革近代主義思想から「シングル単位論」へ

日本における「右派・左派」（日本の保守と革新）は、共同体主義、近代主義の点で現在においては思想地図上で非常に近接して存在している。それは理論的にも実践的にも、ポストモダン水準で対処していこうとするものたちにとっては、有効性もなく、魅力もないということである。ひとつの切り口から言えば、資本主義社会を、人

1) 近代合理主義は、宗教を「悪役」「はみご」「いじめられっこ」「おにっこ」「ごみ箱」にしつつ、実はそれと共存するシステムである。その場合の既成宗教は、近代主義が与えた「居留地」枠内に収まることで、その生存を許可される「矮小化された」存在となっている。身体（物質）と精神の二分法による棲み分けである。だが、宗教全般にはそれにとどまらない、近代主義の枠組みを超える可能性が秘められている。〈たましい〉の観点は、その可能性を展開しようとするものである。1995年のオウム真理教事件は、そのように宗教を「近代主義的に去勢」されたものにする近代社会という構図そのものを問い、〈たましい〉の観点の重要性に気づく契機となりうるものであった。だが、その後の日本社会は、そのリーダー（教祖）、麻原彰晃に、精神医学的観点から「性格異常者」「人格障害者」というレッテルを貼ることで例外扱いし、自分たちの社会のあり方や、宗教観自体を問う契機をみずから閉ざしてしまった。

図-1 〈スピリチュアリティ〉と他の思想との関係



間が主人公になっていないと批判し、民主的人間的良心的社会（あるいは正義）にむけて根本的改革があるといっていれば「革新」であり、「自分は正しい、悪いのは敵だ」とおもいこめるような呑気さがあったことに対する、真剣な反省があると思う。

それは、自分（たち革新側）の位置や内面を深く掘り下げない鈍感さであり、それが運動の停滞や若い世代に魅力的にうつらない原因のひとつでもあることへの無自覚である。「右」が、国や家族や天皇などの伝統的な精神的共同体との一体化が好きなものに対して、「左」は労組や仲間や組織や家族といった、温かい連帯共同体・利害共同体が好きなのである。両者には、共同体への根拠なき信頼があり、そこへの依存、共同体内での権力関係と個性の無視、個の自己決定と責任からの逃避、多様性とエンパワメント概念の無理解といった共通性がある。たとえば「弱者」というような表現への鈍感さ、結婚・家族制度へ自分が荷担していることへの鈍感さ、セクシュアリティに対する旧態依然の感覚、組織やリーダーといったものに従属することへの鈍感さ、それらには、自己決定する自由な主体という意味での「個」への希求が決定的に欠けている。「会社に従属する人間」との相違を見つけるのは難しい。その保守性には目を覆うばかりではないのか。

詳しい思想地図の2つの座標

したがって、思想地図上の有効な座標軸のひとつは、家族単位に象徴される共同体主義を批判できるか否か、言い換えれば、「シングル単位度」の強弱である。これは、拙著[2003a]でも述べたように社会性の程度を含むし、上記①～⑦の各側面も入れた総合的指標である。

もう一つの座標軸は、近代主義の限界をどこまで意識するかというポストモダンの程度である。そこには、機械論的・要素分断的な把握を超えるホリスティックな視点ということも入るし、意識されない「深層意識」「混沌の闇世界」を射程に入れている程度が含まれる。またポストモダンを、単なる価値相対主義、したがって現実に対する追従に墮落させないために、環境問題を含めて「いのちのつながり」に覚醒している程度を含む。そうした近代主義を乗り越える程度、すなわち「スピリチュアル度」を、もうひとつの座標軸として描いた思想地図が、図表—2である。

〈スピ・シン主義〉を理解するための日本思想地図

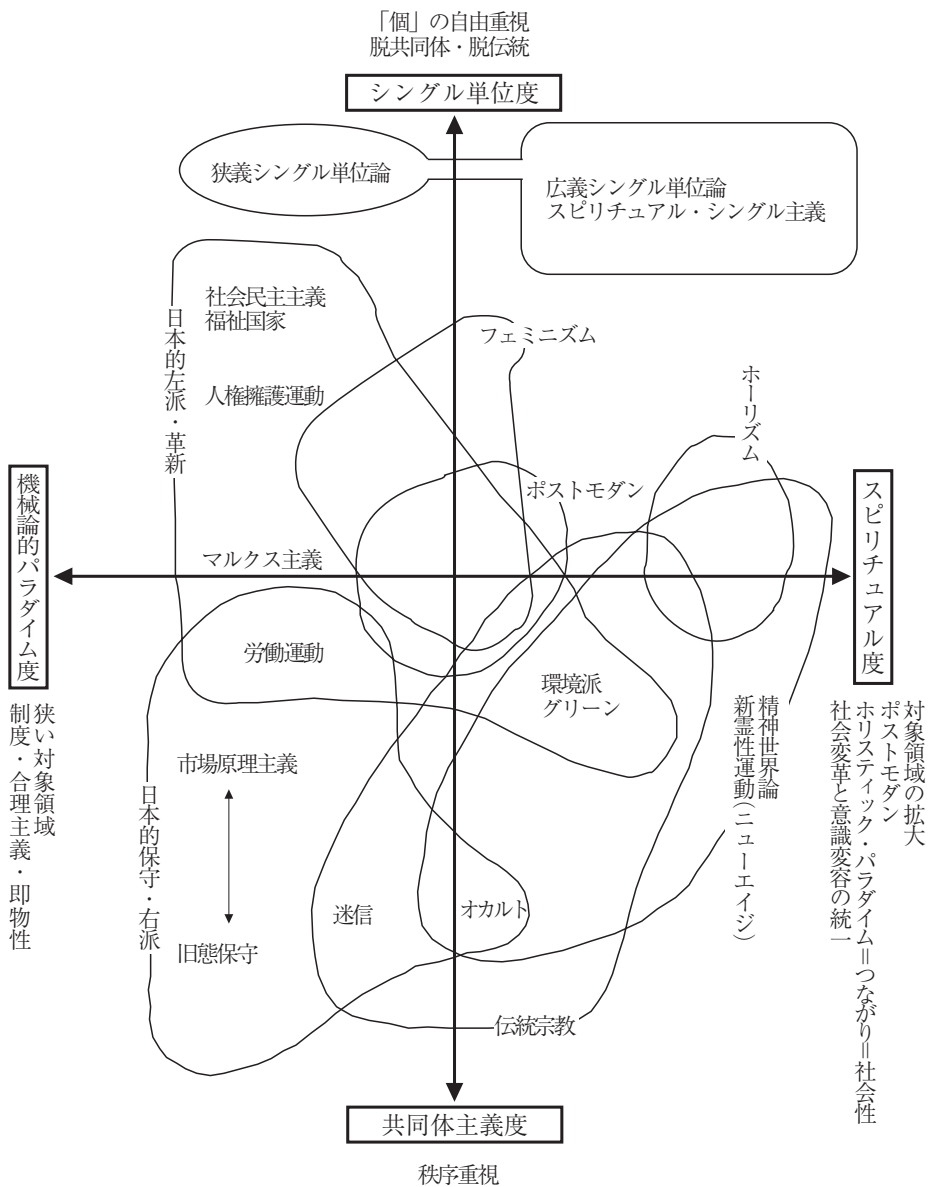
この2つの指標によって、保守・革新といった既存政治はもとより、レベルの低い宗教、適応による主観的満足だけを問題として社会改革から目をそらせる体制補完物になりさがった各種精神世界（ニューエイジ）・心理アプローチなどに共通する、「志の低さ、センスのなさ、近代主義的限界」を浮き彫りにしたいと思う。前述①から⑦の各領域にわたって総合的に捉える程度を含み、きれいな心、繊細さ、平等意識、品位ある生き方、そして、つながりを意識した社会性ある行動等を総合して、〈スピ・シン主義〉は考えられている。

図—2が示すように、広義シングル単位論、すなわち〈スピ・シン主義〉は、シングル単位度に加えて、スピリチュアル度の高さを求める主張であると補足することで、その思想地図上の位置から、男女二分法・近代主義内での単なる「個人の権利」を重視するレベルのものでなく、ラジカルに「社会全体と人間と運動の質」そのものの変革を構想するところの、ポストモダン論を発展させようとするひとつの挑戦概念であることが伝えられると思う。

「制度を制度たらしめているのは、法や規制や政治機構の形式そのものより、その基礎にある、人々が共通に抱いている観念や慣習や期待や信念、共同幻想にある」ということは社会科学的な最低の素養であるが、〈スピ・シン主義〉は、シングル単位論をより拡張して、その観念や共同幻想自体と格闘しようとする意思なのである。また、上記した「分析の物差しとなるための“理念”」であると同時に、諸議論に対して、〈スピリチュアリティ〉やシングル単位の角度から問題提起して、ある種強引にその土俵で議論を展開しようという戦略的な枠組みの論なのである。

図の中の他の思想について少しだけ言及しておく、**「日本的な保守・右派」**は大方、共同体主義かつ近代主義内なので左下に位置するが、新自由主義的な動きは、旧

図表-2 シングル単位論〈スピ・シン主義〉を理解するための日本思想地図



組織を破壊して一部で脱共同体，個人の能力中心の仕組みにしていくので，保守の中では上方に位置している。

合理主義が，目に見える具体的に把握可能な社会的関係（制度，権力関係）の維持や変革を論じるという意味で，伝統的な社会運動は，左側に位置している。そうしたものの「日本の革新・左派」のうち，主流労働運動は年功制度や正社員中心主義を維持しようとする保守性をもっているもので左下に近くなるが，障害者，女性などの人権擁護運動派は多様性を認めていこうとする動きをもっているもので左上に近い。マルクス主義的な部分は，アナーキズム的な側面を嫌い，個人よりも集団の力と前衛党的な指導性を重視し，近代主義的合理性への過度の閉じこもりがあるので，左真中あたりに位置する。

環境運動派には，伝統的左翼体質のものから，ホリスティックな視点重視のものまでいろいろなものがあるが，具体的に脱共同体の方向で制度改革を指向する側面は弱いと思われる。しかし社会性あるものも多いので，領域としては真中あたりを中心に広く分布している。

学者の世界で影響力をもっている「いわゆるポストモダン的な議論」も多様な亜種をもつが，具体的な社会改革の姿勢が弱いものの，近代主義批判，共同体信奉への相対化視点などは最低もっているもので，真中あたりだろう。ただし，対象領域を拡大し，社会変革まで射程に入れるような，私が使う意味での，真にラジカルで積極的なポストモダンの意味では，右側にある。

伝統宗教（救済宗教）もありとあらゆる側面をもつが，家族や伝統組織を重んじ，性的保守性も強いこと，および「解放の神学」など現実政治へのかかわりをもつ社会性あるものは少数なので，全体としては下方に重点がある分布と考えられる。現世利益に即物的に応えようとしたり，政治的保守層と結託しているというもの（図の左下）も多いが，近代主義的機械論的合理性は重視せず，理性的概念ではつかみきれない何らかの「精神的かつ神秘的なもの」を重視することを「靈性」というかたちですすめようとするので，図の右側に重点をもっている。

新靈性運動（ニューエージ，精神世界系）は，伝統宗教と重なる領域が多いと考えられるが，教団への従属から離れていたり，政治的保守主義との結びつきが弱く，自己決定を重視し，社会変革の意図をもつものも少しあるといった点で，私のいうスピリチュアル度が少し高いと思うので，伝統宗教よりも少し右・上にずれた位置に書いておいた。しかし全体として社会改革から目をそらして，主観的自己変容を重視する

ものが多いので、真中よりも下に重心がある。

ホーリズムは、ポストモダンかつ新霊性運動的なものの一つであるが、重要な視点を総合的に提供しているので、今回はとくに独立したものとしてあげておいた。「自民党的政治、エゴの生き方、オカルト、迷信」といったものはとてもレベルが低いので、左下に位置する。

最後に、「芸術的活動」に言及しておく、それは「混沌の闇世界」のエネルギーをそのままの形で表出するものなので、基本的には右側の領域に位置すると思うが、社会性についてはまったくバラバラなので、図に書き込むことができなかった。私の希求する「皆がもてばいいとおもう自己の創造性、社会性を表すアート」は、右上に位置するだろう。

2 〈スピ・シン主義〉の思想的特徴

ニヒリズム、ポストモダニズム

以上が基本的な〈スピ・シン主義〉の思想上の位置であるが、各要素を対比的にまとめたものが図表—3である。以下、それをベースに、いままでのまとめも含めて補足しておこう。

〈スピ・シン主義〉は、哲学的・思想的には、ニヒリズム（虚無主義）とポストモダニズム（近代主義の限界を意識するという意味での広義ポストモダニズム）を基礎のひとつにもっている。近代社会では社会全体に通用するような道德体系は存在しない、絶対的普遍的根拠（絶対的善悪）などない、「大きな物語」の正当性などないという近代批判（近代合理主義批判）、つまりニヒリズムかつポストモダンを一度通過している考え方である。

ここでいう「ポストモダン」とは、繰り返すように、知的遊戯にほうける相対主義・無為主義的な「狭義の、いわゆるポストモダン」ではなく、経済成長依存にもとづく近代合理主義の時代限界性を意識化する営み、すなわち、成熟段階に対応した「脱成長主義、脱近代主義」を模索する営みとしての、「広義のポストモダン」の意味である。

近代主義・啓蒙主義への懐疑としての〈スピリチュアリティ〉概念であるが、それはまた、既存の宗教や道德・規範、権威や制度もいったんニヒルに否定し、個人を従来の束縛から解放すると同時に、無根拠の恐怖、孤独の覚悟をもまた出発点に据えなくてはならないと自覚するものである。言い換えれば、近代社会を相対化して捉え、そこでの価値の歴史的特殊性を自覚する。誰にも自明的な普遍的共同体などないとい

図表—3 〈スピリチュアル・シングル主義〉の価値体系

旧秩序	⇒ 解体 ⇒	新しい秩序の模索
家族単位システム		〈スピ・シン主義〉的システム
社会環境の変化		
モダン		ポストモダン
高度成長		ゼロ成長 低成長・成熟社会化
近代国家枠内の発想と実態		グローバル化
貧しい社会		成熟社会 豊かな社会
冷戦時代 左右対立		冷戦終結, 社会主義崩壊
標準家族が多数		「標準」の減少
価値観		
物質主義		ポストマテリアリズム (脱物質主義化)
民族主義, ナショナリズム		文化多元主義, 異質なものの共存
同質性		多様性
一国主義視点		世界は一つ, グローバル視点
		地球環境問題の浮上
狭義の経済重視主義		文化, 環境, 人権, 教育, 医療, 福祉, 住居 など非物質的価値が重要と認識され, 思考枠組みに組み込まれる。コストとベネフィットの計算に組み込まれる。
モダニズム的価値体系 (エゴイズム, 自己犠牲 禁欲主義, 道徳主義)		ポストモダニズム, アナーキズム
政治		
旧左翼と右翼の対抗		自立した市民中心の新しい政治
国家と企業と抵抗勢力による 妥協としての政治		NPO/NGOの重要化
近代主義枠内改革		国家間の連携強化, 地方分権化
既得権擁護で新しい変化に反対		
経済成長を背景とした福祉国家化		新しい社会民主主義型福祉国家
小さな福祉国家		
新自由主義, 市場万能主義		
差別主義 (少数派排除) と 機械的平等主義		マイノリティ/被抑圧者の視点からみた 多様性の重視
多数決による決定 (多数派)		少数派の権利重視

標準重視

標準廃止 多様性平等

社会の基礎単位

家族単位

⇒

個人単位

人間関係・組織の発想とルール (つながりの論理)

役割

脱役割

共同体

脱共同体

ジェンダー維持

ジェンダー・フリー

性差別

ジェンダー平等

性的少数派の権利

同質者の道徳・異質排除

異質者たちの共存

<男女二分法>

非<男女二分法> ⇒多様性・個人差

男女異質, 同性は同質

同性内の差異承認,

両性間の接近・類似・重複の承認

同性愛, トランスジェンダー,

インターセクシャルなどの多様

性の中に異性愛を位置付ける

ステレオタイプ

非ステレオタイプ

暗黙のルール

明示的ルール

片働き異性愛結婚が当然

多様な関係の承認と権利保障

それ以外を逸脱視

結婚・出産が幸せ

幸せの多様化

家庭内の調和を前提

家庭内に問題があることを承認

愛重視

〈スピリチュアリティ〉重視

(家族愛, 愛社精神, 愛国)

友情・友愛 (家族や国家を超えた繋がり)

保護/支配

反コントロール, 反保護

組織やルールや法や共同体

自己決定, 個人間の柔軟な対応

を尊重した運営

ネットワーク: 連帯

恋愛的愛という激情の美化

反激情

マニュアルあり・答えあり

マニュアルなし・答えなし

まず共同体 その下に個人

まず個人, それを基礎に新しい

つながり, ネットワーク

和, 人並み, 調和, 服従

自由, 自立, 自己決定, 多様性!

一体の役割家族

距離感あるスピリチュアルな「家族」

必要・利用としての関係	個人の生活力上昇
ノン・エンパワメント	必要・利用でない関係
自己否定	エンパワメント
優越・劣等・競争	自己肯定
過保護・甘やかし	比較・競争しない
過干渉	自立 適度の突き放し・厳しさ・見守り
	自己決定 自由重視 干渉拒否
	多様性尊重
	冷静 適切な距離感
	責任付与 頼まれれば協力・援助
力, 権力, 暴力	非権力・非暴力
権威主義	権威解体, 自己決定
支配・主張のしあい	理性的・対等な話し合い
(闘争と服従)	対等に聴きあう関係
所有の感覚 〈所有する者〉	非所有 〈所有せざる者〉
収奪, 〈レイプ〉	他人への寛容
他者への不信・エゴ	世界・他者への基本的信頼 協力
	共感 他者への正当な関心
他者との切断	つながりの自覚
義務的責任 押し付け合い	積極的責任感 貢献感 (役に立ちたい)
あわれみ 同情	尊敬 共感 協力
保守的・因襲的	創造的破壊, ユニーク, 革新的
世間体を重視	世間体を気にしない 自己の視点重視

うことを確認する (この段階に、異質な者たちの共生のルールとしての「狭義のシングル単位論」が対応する)。「科学」のたつ基盤^{もろ}の脆さ、相対性を自覚する。立証不能なことは多く、不確実性が私たちの人生を覆っている。論理的にみて「AだからB」とみえていても、実はそこに無数の飛躍が隠されていることを自覚する。私たちは思いのほか、共通の思い込みや飛躍をベースにコミュニケーションしているのだ (拙稿 [2003b]参照)。そこには大きな深淵がある。

立場の選択, 近代の徹底

しかし、私の考えは、そうした「無根拠さの確認」「混沌の闇世界の確認」にとどまるものではない。シュールだ、不条理だとカオスをそのままカオスとしてつかまえ、あるいは「無意識」を自分勝手に解釈して、人々の真剣な生き方を横からあざけるよ

うに批評し、わかった気になるようなおろかな無為主義者ではない。つまり簡単なことをむづかしく言うだけの非実践的なインテリの限界を批判的に意識した論である。通常いわれる「ポストモダニズム」の価値相対主義に基づく政治的無為主義、事実上の現状肯定（価値間に優劣なし、「輝きな日常でよい」論）に対しては、近代合理主義の積極面を擁護すると同時に、積極的に現在のシステムの中で自分の占める位置を確認し、自分にできることを秩序との関係を考えながら選ぶという「立場」、「イデオロギー」の観点を入れるものである。「客観的なただ一つの真実」ではなく、自分の立場や視角から再構成された「私にとっての現実」をベースに考え、ぐちゃぐちゃ言うだけではなくて行動する（本稿で繰り返し用いる“リアル”“リアリティ”はこの「現実、概念にもとづくもの」²⁾）。

「エゴイズムな個、閉塞の個」という問題に対しても、ポストモダンな個人がどこに向かっていくべきかという問いに、安易に「憧憬としての宗教、近代家族あるいは前近代的共同体への回帰」を対置するのではなく、スピリチュアルな力に基づく新しく作り出すネットワークと具体的なシングル単位の社会システム（広義）を提起する。「シングル単位論」は、各拙著で示したように、近代を徹底する現実的積極性を明確に意識つつ、近代の徹底の先に近代秩序自体の解体をめざすというポストモダンを基本的な基盤とするものである（二段階戦略）。制度や政策が人々の意識を規定していく点を重視するという観点から、社会民主主義的福祉国家をひとつの実際的目標とする（過渡的目標であり、さらには近代的枠組みを超えるシングル単位システムの構築を目標とする）ものであり、その意味で唯物論的発想（広義）を維持している。

立場の選択の問題、利害・階層と価値観の問題、「物語」の選択の問題、「小さな関係」を作る自由の問題である。「大きな物語」はなくとも、自分にとっての選ぶ価値のある「物語」はあるとみるのである。イデオロギー的飛躍を論理体系に入れ、「前向きの幻想」「選択の自由」へと話を展開させる、ひとつの「主義（イズム）」——それが普遍性を持たないことを自覚する「主義」——である³⁾。

-
- 2) いちおうの水準もっている社会科学においては、この自覚は当然である。歴史とは、「現在における過去の絶えざる再構築」である（上野 [1998] 11ページ）。したがって、歴史をめぐる闘争は、立場の違いを反映して半永久的に続く。ナショナリストとの闘いもその意味で続く。
- 3) モノゴトの法・真理は、それがあるとすれば、それは何らかの権威によって示されるのではなく、そのもの自体のなかにある。それを見つめることによってしめされる。

ただし、1) 必ず秩序、法理、真理があるときめつけることは、ヘーゲルの間違いである。それは認識を歪める。2) 認識は利害、意欲によって歪んでいる、というべき。その歪みの偏差を意識するような記述、歪みを認識しつつそのものの内在的性質に近づくような記述、が必要である。こうした両面の矛盾した全体を統一的に探るのが哲学である。

宗教的精神性の尊重、イデオロギー、文化多元主義

〈スピリチュアリティ〉概念は、まず直接的には、救済宗教や新靈性運動の中であって私が積極的と思える部分であり、その意味で思想的には宗教・新靈性運動の一部という側面をもっている。また〈スピリチュアリティ〉概念は、人間社会を、各要素が相互作用しており、互いに相手の可能性の条件となっているような有機的な複合体(システム)とみる見方を反映した概念でもある。それを「丸ごと」「全体性において」ホリスティックに捉えたと表現している。

ただし、そうしたシステム論的な把握からは、〈スピ・シン主義〉的な「価値を積極的に押し出す見解」への批判があることには注意を払わなければならない。たしかに、従来の社会批判や積極的な社会理論が、ともすれば自分の視座を神のように絶対的真理の視座として、それを基準に展開するものであった場合がある(しかもそのことに自覚的でない)こと、言い換えれば規範的な理想を定式化してそれを尺度として現実社会を評価してしまったことがあったことは忘れてはならない。

しかし、先述したように、私はだからといって価値相対主義による無為主義を選ばない。そこに自分の立場、意欲に基づくイデオロギーをいれて、限定された認識間の闘争の一翼を担うことを選ぶのである。自分一人がすべてを示すことはできないが、自分の立場から見える「隠れた構造」を「暴露」することはできるし、今とは異なる社会発展の可能性を示すことも、自分の立場から見える社会の病理およびその問題の解決方向を指摘することなどもできるのである。つまり、システムの相互関係において自分のイデオロギーや実践、その責任や影響を組み込むのである。

この視点に立って、国際的な人間関係においても、〈国境〉を超える、文化多元主義・多様性尊重の立場をとる。単なる価値相対主義は、ファシズムやナショナリズムへの道も開く(なんでもあり、絶対的真理というデマゴギーを伴って)が、私は絶対的な価値がなく、私の認識が歴史的制限、文化、民族、国家、諸制度、階層、個性を通じてのみたち現れることを自覚するがゆえに、他者(他文化)の認識をも、私の認識と同じレベルで「認める」。相互尊重、相互承認の上に、歴史的、文化的、社会的立場の限定を自覚して、私は私の「意欲」を語るのである。

つまり、(ア) 反イデオロギーでなくてはならず、(イ) しかし、自分の意見がイデオロギーであるということを知覚すること、すなわち「意欲」による歪みに無自覚な馬鹿者であってはならないということ。多くの人々は、この矛盾を意識していないので、(ア)(イ) どちらかの側から他方へ向かって批判し、また批判されてしまう。その批判は当たっている。しかし、その批判はまた正当に批判されてしまう。大切なことは、この矛盾を意識して引き受ける2面性ある記述である。

言い換えれば、以上のことは、私の立場や実践が他者にとっても正しいということの意味しない。自分が特権的な立場に立っていない、自分にも「みえない点」があることに自覚的であるべきは当然であるということである（文化多元主義の意味）。その相対性は死ぬまで持ち続けなくてはならない制約である。

オドー主義, アナーキズム

こうした思想的立場は、ル＝グウィンがいう「オドー主義」に近い。「オドー主義」は利他性を尊重するが、それは自己否定、自己犠牲、禁欲主義ではない。自己の喜び・利益としての利他性である。オドー主義は利他主義ではない。「人のためにしなくてはならない」「自己の利益よりも他者の利益を優先しなくてはならない」という強制が一切ないからだ。オドー主義には強制はなく、そうしたいからするのである⁴⁾。

また「オドー主義」はアナーキズム（無政府主義）である。ここでいう「アナーキズム」とは、単なるテロリズムや無責任な口先だけの批判をするものだけでなく、また極右の人々が掲げる社会進化論に基づく「経済自由主義」のことでもない。初期の道教思想のなかに予示され、のちのシェリーやクロボトキンやゴールドマンやグッドマンによって解明されたところのものである⁵⁾。

私の〈スピ・シン主義〉もこのアナーキズムの精神を基礎にもっている。すなわち、権力主義国家を批判し、権威主義的なあらゆるものと闘うというプロセスにこそ希望をもつものである。自分たちをいつのまにかがんじがらめに縛りつける「善」「道徳」に警戒的になり、「協力」「自発的」という名で自己抑制し従属することに意識的に対抗するような、そんなアナーキズムである。自分の自由を押え込む目に見えない壁を壊すような意識的な「反逆者」である⁶⁾。アナーキストは、自ら選んで選択の責任を

4) 『所有せざる人々』のシュベックはオドー主義の精神で、ウラスの人々に語りかける。差し上げられるのは自由以外に何もない。相互扶助というただ一つの原理がある以外、なんの法律もない。自由な連携という以外に政府もない。国家も国民も、大統領も首相も、将軍も監督も、上司も銀行家も、地主も、賃金も、慈善団体も、警察も兵隊も、戦争もない。私たちは共有者であって、所有者ではないのです。…与えていないものを人からもらうことはできません。だからあなたがたは、あなたがた自身を人に与えなくてはなりません。〈革命〉を買い取ることは出来ません。〈革命〉を作ることも出来ません。あなたがたに出来る唯一のことは、あなたがたが〈革命〉になることです。それはあなたがたの魂の中に存在します。そこ以外のどこにもありません。ル＝グウィン[1986] 388-9ページ。

5) 以上の説明は、ル＝グウィン [1980] 421ページ。彼女はまた、エンゲルスやマルクス、ゴドウィン等からも知恵を借り、格闘し、シュベックが誰であるかにたどり着いたという。『所有せざる人々』において、ル＝グウィンはついに、2つの完全な世界とその苦悩によって、彼を説明できたのである。ル＝グウィン[1992] 252-3ページ。

受容するものことである⁷⁾。

とするなら、上からの「大きな物語」にもとづく秩序に規定された調和的善状態に潜む強圧的抑圧を嫌悪し、むしろあらゆる場所、あらゆる時点からの不断の抵抗こそが全体における「善」に最も近くなるであろうとみる立場である。ニヒリズムから単なる無気力（無為）になるのではなく、論理的かつ批判的であるような、健全な懷疑主義としての、アナーキズムである。したがって実践上は、個人の自由意志をベースにした、身近なところでの具体的抑圧に対抗する小さなレベルの具体的連帯と具体的相互扶助を提起する。

〈スピリチュアリティ〉という幻想

これはいいかえれば「自分にとっての物語を楽しむ力」を尊重するという視点でもある。物語（幻想）こそ、人間の特性、人間の文化の特性かつ個人の自由の基礎とみるのであり、それを非合理だといって切り捨てる傲慢さ、単純さ、および非現実性をやめようというのである。ここに〈スピリチュアリティ〉概念が重要となってくる。

〈スピリチュアリティ〉〈たましい〉とは幻想の側面をもつものである。しかし、私たちの生き方を左右する力をもち、複雑性と多様性と総合性を近似的に捉え、美しくよくできた概念である。しかも身体／肉体と不可分なものという意味では実在しているものである。人間の愚かさを示し、同時にこの世の不思議さや偶然の中で、個々の人間が生きていく上で、類として「善なること」をなしうる可能性をもたらしうような、可能性ある概念である。それは、近代的人間の認識や理性の限界を超え、人間のいいかげんさを含めて人間の連帯の可能性を広げる。世界の存在の実情と実存に近づくときになかなか使い勝手のよい概念である。しかしもちろん、完全無欠に人間や世界を正しく反映しているわけではない。小さな頭脳しかもっていない人間という種には複雑な世界をそのままつかむことができない。

ただ、人間が作り出した二分法、理性と非理性を、再び統一するような作業において、「双方の尊重」というように示せる、人間観、生命観、社会観、世界観を変革するときの鍵となるような概念である⁸⁾。本当のところはわからないが、人間の分かつ

6) 揺さぶりをかけ、活を入れ、習慣を破り、人々が疑問をぶつけるように仕向けること、それが目的だ。アナーキストラしく。何が起こるか予測はつかない。自由とはそれほど安全なものではない。ル＝グウィン [1986] 498ページ。

7) 「革命前夜」ル＝グウィン [1980] 438ページ。

8) これに関連して、ル＝グウィンの「魂」のとらえ方を紹介しておこう。「神秘主義者なら魂を肉体から分離させることができるだろう」（「革命前夜」ル＝グウィン [80] 431ページ）。つまり、二元論者、現実逃避家なら、そんな発想ができる。しかし実際は、魂と身体とはひとつ

たような傲慢さを反省して、過去の良質な人々の経験や知恵に学びながら、寛容と沈黙を基礎に、トータルにつかもうとする概念である。従来も主体／客体、理性／非理性性を統一するような志向をもった〈スピリチュアリティ〉と似たいくつかの概念はあったが、神秘主義に流れたり、西田幾太郎『善の研究』のような、難解な言葉でごまかすような傾向があった。〈スピ・シン主義〉はそうしたものではありませんと意識するものである⁹⁾。思考以前の未分化の世界という発想はわかるが、それを小難し

なのだ、というのである。このある種、唯物論的な統一的把握といえよう。ル＝グウィンとは、「樹上性」を尊重する作家であり、「世界＝有機体としての森」を尊重するということは、精神と物質を（反分離的）統一的に捉えるものであり、その意味で近代二分法世界（物質主義）に対して、きわめて精神性重視のスピリチュアルな精神あるものである。だがもちろん「超越者」などを想定する単純な宗教性を否定する。そうした「魂」概念は、彼女独特のものである。

- 9) 西田幾太郎『善の研究』岩波文庫（1911年）。思考以前の、区別する思考を越えた、人間本来のリズムが開示される場（純粹経験）、それをつかむ「直感」を大事にすること、直感の上に、「反省」、「認識」を経て「自覚」することが大事と。そして「絶対無の場」つまり死を自覚することで、「有の場」日常生活が意味ある特殊なものになると。平たく言えば、人生の意味を、死の可能性がいつもあるのだから、今日を一生懸命悔いないように生きることのみいせという。

この本によって小難しく理解困難な、そして言葉のセンスとしても非常にセンスの悪い、伝統的な哲学用語の体系が作られた。言葉の空転、言葉によるごまかし、わかったような気になる錯覚が生み出された。そうでないかどうかは、それを日常用語で誰にでも分かる言葉に置き換えたときに、はっきりする。言葉の空転体系によって、わかった気になる世界を作り上げたのだ（井上ひさし、立花隆「二十世紀図書館」『文藝春秋』98年7月号）。

いんちき論、抽象度高いふりの議論をやめたい。例えば、「無」などといういいかげんな概念を振りまわすだけの議論をやめたい。三木などの「絶対矛盾的自己同一」など、ただうまく論理的には説明できないけど「説明できないものというような矛盾なのだ」と、名前をつけて「説明した気になっている馬鹿な論理」の典型例だと思う。そういうことを論じていて、何かわかったかのような錯覚をするのがインテリの悪いところである。「矛盾」とはそもそも状態のことであって、統一的実体ではないはずだ。抽象的な概念で分けわかんなくなって自分までもごまかしてしまう。説明できていないのに説明している気になるという人は、実は頭が悪いのだ。そういう頭の悪さを人間はもっている。だから簡潔に言えるかどうかが重要である。簡潔にいうと正体がばれるから。自分でも誤り（おかしさ）が分かるから。中学生にわかるように言おうと思うとき、外国語に翻訳するときにも、自分の論理のごまかしがわかる。だから抽象度の高そうな議論は適当に切り上げるのがよい。中学生にもわかるように言えるかってことが大事。

そうなる私がここで述べていることも怪しくなる。まだまだ抽象的だ。説明しやすい概念を借用してわかって気になっているが、本当にわかるように言い換えることができていない。自覚しながら徐々にわかるように努力していきたい。「理論的洗練度」が高いといわれるものもたいしたことない。本質は呪術的オカルトをうまく難しくいってるだけ。例えば、島菌[1996]に出てくる学者の意見が「理論的洗練度が高い」と言われるが、それは単に従来の学問の様式・ルールにもとづいて書いていただけのことである。中学生にもわかるように言い換え

い言葉に置き換えても何かが新しく付け加わるわけではないし、矛盾したものを言葉の上で結合させたからといって、その矛盾がなくなるわけではない（宗教の愚かな神学問答の二の舞に陥ってはならない）。平易な言葉で説明できるか否か、現実的に変革する力があるか否かが大事である¹⁰⁾。

思想潮流：ポストモダンと宗教と新靈性運動と合理主義

ここでは、他の人が世界的な思想状況をどのようにみているかを紹介することを通じて、〈スピ・シン主義〉の位置を探ることとしたい。

宗教や新靈性運動には、限界もあるが、共通した「良い点」——物質第一主義を批判し、愛や友情や寛容や慈悲や精神的成長を重視するような総合的観点——もある。また、歴史的事実として、宗教的思想は、資本主義の展開・発展の中で消滅していく前近代的迷信ではなく、精神・文化面を中心に息長く存続する力をもっているものであった。その意味で、現代世界思想において、救済宗教は重要な位置を占めている¹¹⁾。

ればたいした内容でないことが一発でばれる。

- 10) 「絶対矛盾的自己同一」など従来の哲学概念のばからしさ（非論理性）。それは宗教のためなどと同じである。そんな言い方して、なにかを説明したり、わかった気になっているのは、次のようなペテンと同じ論理である。「人々が戦争するのは、実は人間には把握できない、認識できないある種の光が、太陽から地球に送られているからである。したがって、絶対に人間社会から戦争はなくなる。」これに反論することはできない。なぜなら、人間には把握できない光だから、その存在がある／ないことなど議論できないし、戦争も実際にあるからである。こうしたペテン論は、近代主義的論理、合理主義の人間の狭い論理で批判されてもいたくもかゆくもないのである。
- 11) ダニエル・ベル（宗教回帰）、ロバート・ヘフナー（歴史宗教への回心）、サミュエル・アイゼンシュタット（近代化は歴史宗教込みの再編）は、いずれも、救済宗教の現代における重要性を指摘しており、今後各文明は歴史宗教の伝統に回帰していく、宗教は永続的な価値をもっているとみる。近代化が展開すると、マイクロコスモスで生きていた農村、部族社会住民が、マクロコスモスに組み込まれ、救済宗教の大衆化、宗教的原理主義が台頭する（イスラームに典型）。また、日本や米国などのようにセクトや新宗教の台頭という形での救済宗教の大衆化にもなる。宗教脱却よりも、宗教に組み込まれ、新靈性運動も含めて宗教が現世的な関心と結びついていくのである。島薮[1996]15章より。

イスラームにおける政治化については独自の理由もある。イスラームの政教一元的性格に加え、イスラーム制度廃止の後、社会的問題を解決する力がイスラーム諸国において未だ整っていないことが問題を複雑にしている。西欧化も失敗、社会主義も急進的民族主義も失敗し、植民地から独立しても、昔の統一国家にならない部分がでてくる。しかも指導者は西欧的発想に傾き、全体の「世俗化」が進んでいる。植民地後は国境が外側から確定されて分断される。こうした状況が複合して、60年代までの民族主義の衰退後、イスラーム改革運動が各地で力を持つようになったのである。インテリの宗教化や、農村部の発言力強化もあり、イスラームではその改革運動が政治運動として活発化している。現代に適応できるようなイスラーム的の制度、

現代における重要な思想的潮流としては、救済宗教、新靈性運動のほかに、もちろん近代合理主義もあるが、それに加えてポストモダニズムも、独自のものとしてあげることができると思う。ポストモダニズムは、周知のように啓蒙的合理主義が近代的枠組み（特に先進工業国）の中での思考体系であったことを暴き、そこでの真理・価値・規範・道徳は、宗教や諸民族の伝統的価値と同価値でしかないというように、認識論においても倫理においても、近代合理主義および宗教の「優位性／普遍性の自覚」に対してそれらの相対性を指摘するものである。これは、まだまだ近代主義が根強い中で「一部専門家の理屈」として軽視されている面もあるが、その内容や議論の質の完成度からいって、まぎれもなく、ひとつの思想潮流に数えることができる。

こうした現代の思想潮流の並列状態に対して、アーネスト・ゲルナー氏（社会人類学者）は次のようにみている（『ポストモダニズム——理性と宗教』、1992年）。彼は、現代世界を導いていく主要な思想的アクターは、①宗教的ファンダメンタリズム、②ポストモダニズム、③合理主義ファンダメンタリズム（啓蒙的合理主義）の3者であるとする。①と③は「普遍的な真理」「普遍的な知」を打ち立てようとする点で類似しているが、①は、近代化の中で非合理なものを信じる基盤が狭くなるので多くの人が従うのは困難である一方、③も実存的危機に応答できず大衆的基盤が十分にもてないと、両者の限界を指摘する。このゆきづまりのなかで、相対主義の②が台頭しているとみる。ただし、これも専門的すぎて大衆的支持を得られないし、内容的にも態度決定から逃避して曖昧な自閉的言辞に閉じこもるという欠点を持っており、決定的勝利を得られないので、結局、現代は3つの思想が3すくみの状態にあるという（ゲルナー氏自身は③の立場）¹²⁾。

私は、現代の思想的潮流を把握するためには、このゲルナー氏の3者見取り図をベースに、「宗教」にその亜流として「新靈性運動」を入れるか、あるいは上記3者に新靈性運動を付け加えて「宗教、新靈性運動、合理主義、ポストモダニズム」の4すくみ状態とみるのが適切であると思っている。その上で、そのどれかではなく、それらのいいところを総合して新しいバランスを作り上げる〈スピ・シン主義〉ができないかと模索するのである。

また、ポール・ヒーラス氏は、新靈性運動を、「大いなる自己」「超越的実在と自己」

イスラーム民主主義を創出することが求められている（小杉 [1994]）。

12) 島蘭[1996]15章をもとにまとめた。以下、ヒーラス、トゥールミン、テイラー各氏の議論についても同じ。

というように自己を中心化するもの（自己宗教 self-religiosity）と捉え、ポストモダンでは自己を非中心化するものであるもので、両者は異なるものであるとする。新霊性運動が重視する「聖なるもの」は前近代的なものであり、伝統への回帰を否定するポストモダニズムとは別物とみる。

それから哲学者スティーブン・トゥールミン氏（『ポストモダン科学と宇宙論』82年）は、科学哲学の知見をもとに、ポストモダンの知、科学と宗教の複合的知への「知の構造の変容」を示す。もともと結びついていた自然宗教と自然科学が19世紀後半に切断されたことは必然ではなく、近代科学が生態学や心理学等人間・生物を対象とする科学を含めて総合的に発展せず、二元論的問題、専門化による限定厳密主義、客観主義、テオリア（観想）の態度といった欠点をもったためであるとする。しかし、いまや客観主義、傍観者的、専門分化的な科学の限界が露呈し、専門分野の枠内では解けない問題も多くなっている。観察する科学者は被観察者と実践的に関わっているものであり、傍観者としての科学は成り立たない。したがって、今後は、客観的な態度と倫理的実践的態度との結合、自己から切り離された部分の研究でなく、自然全体の秩序とそこでの人間の地位を問う営みが必要とする。宗教が、ポストモダン科学、心理療法（心理学）と生態学、ニューサイエンス的なものを取りこみ、新たなコスモロジー（全体的世界像）をつくる必要があるとする。

哲学者チャールズ・テイラー氏の論考（『「ほんものの自己」の倫理』91年）は次のようである。テイラー氏は、「ほんものの自己」の倫理概念¹³⁾を用いて、それを近代的個人主義の核心とみなし、評価する。現代文化批判を近代の個人中心主義に帰して宗教復興を唱える論（ダニエル・ベル等）や、ポストモダンのアイデンティティの解体を批判し、「ほんものの自己」の理想こそ、今後も大事にしていくべき道徳的理想の力を持っているとみる。それは、「ほんものの自己の倫理・文化」のなかにある「誰にもかけがえのない人権がある」という観念、日常生活を大切にしながら他者を承認することで各人がアイデンティティを保持できるという観念を含むので、それによって道徳的倫理的力があるということになる。ただし、この積極性を見失わないためには、自己実現や独自性の発揮において、自己を超えたもの（歴史、自然、社会、他者との連帯、神）とのつながりが不可欠であるということを忘れないことが重要であるとする。それを無視して、主観主義が強くなると「ほんものの自己」は社会の断片化、エゴイズム、柔らかい専制政治になってしまうと警告する。

13) 自己自身に対する徹底した忠誠の論理、社会や他者や伝統よりも「内なる自分の声」（ルソー）に従う自己決定重視の観念、各人の独自性・唯一性（ユニークな自己）の尊重などのことである。

これらの論考は、すべて、宗教、新靈性運動、ポストモダニズム、合理主義などの区別と存在価値を認めつつ、各人なりのニュアンスの違いで、強調点や支持する潮流の相違があるとみることができる。現代世界の思想潮流として、救済宗教と近代的合理主義以外に、新靈性運動やポストモダニズムといった重大な潮流があること（宗教対科学、伝統対近代の2項対立でなく3者あるいは4者の対抗状況）を認めている点で共通性があることは確認しておくべきであろう。

新靈性運動は、新しい「靈性」に基づく文明が実現すべきものと考えており、自己概念に基づく精神的・高次への志向も、普遍的価値や善悪概念もあるところの価値志向的なものである。一方、通常いわれるところのポストモダニズムは、どう考えてもその中核には、普遍的価値の解体——近代的価値の相対化、自己中心性の否定——がある¹⁴⁾。この点を除いては、社会科学で用いられる「ポストモダン」概念はありえない（「近代の後」という程度の一般名詞の意味で、なんでもかんでも「ポストモダン」に放り込むというなら話は別であるが）。つまり、思想としてのポストモダニズムは、間違いなく新靈性運動ほど「価値志向的」ではない（この点で、新靈性運動は、ポストモダニズムよりも既成宗教に近いといえる）。したがって、ポストモダニズムを新靈性運動と同一視することには無理がある¹⁵⁾。

こうした認識をベースに、私は、現代世界における重大な思想的課題が、宗教と近代合理主義および新靈性運動やポストモダンのそれぞれの欠点を排除したうえで、それぞれの長所を掘みだし、それを統合し新しいバランスを作り上げる点にあると考える。

現代思想に客観主義で臨んでいいものか

島薮[1996]は、本稿でも利用しているように、検討するに値する好著であることは疑いえない。しかし、全体を通読して、私は氏の記述方法やスタンスに不満をもった。というのは、当事者や賛同者の声と批判的観察者の声、洗練された学問的レベルと大

14) 「ポスト・モダンとは、モダンの一つの顔であり、モダンが自己充足に陥ったり、閉塞状態に甘んじたりする『停滞』を打破する思考と運動である、と大枠つかまえることができる。その上でいえば、近代思考が原理的にもっていた、要素主義、人間中心主義、本質—現象〔表出〕論、進歩史観、権力=暴力論、文明—未開論等、を総体として乗り越える原理を提出することを目論むのが、ポスト・モダン論の特徴である。……ポスト・近代といいながら、近代『以前』の、近代『以下』の議論や行動もあることには、十分に気をつけたい。」 鷲田[1993]281—2ページ。

15) 二つのものが等しいという共通点を見つけようとしたらたいい見つかるものだ。「羊の体にヤクの頭をつけるな」ダライ・ラマ [1998] 167ページ。

衆運動レベルがともにあるような複眼的・多重的記述を目指すということで、賛成論と批判論を随所に挿入するのであるが、その結果が単なる並列になっており、主張の矛盾も放置され、しかも、傍観者的態度を避ける、各論との対話的姿勢ももつとつとつ、同時に「学問的な手続き」にもそって記述しようとするので¹⁶⁾、きわめて最終的結論の明確性が欠けているのである。それは同書の結論部分とでもいべき最終15章の論理展開と結論の不明確さに顕著である。

なぜここでこの問題を提起したかという点、新靈性運動にしる宗教にしる、現代の重要な思想問題を論じるとき、私は自分の立場や分析視角や価値判断は、自分で明確にすべきと考えているからである。島園氏も自覚しておられるように（だからこそ記述方法にも上記のような複雑性を導入したはずである）、傍観者ゆえに科学的客観的視点をもてるということではないのであるから、氏はもっと明確に新靈性運動や宗教について、自分の見解を出すべきであった。だが、一方で「何を素材としてどのような判断を下しているのか、できるだけ透明になることを目指している」という理由で「学問的研究」の伝統に従うために、結局「主観を排した、並列的記述が科学的である」と信じて書かれた本のような構成になっているのである。つまり、総体として客観主義的で自分の主張（価値判断）がないのである。

現代の思想的課題の困難さを十分に自覚するなら、AやBやCの提示（紹介）だけでなく、その上で自分としてはどのようにそれら先人の思想や行動と格闘し、今のところの最終的判断はどこなのかを示すことこそ求められているのではないのだろうか。そうした自分の知的格闘の結果の自分の視点こそが、AやBやCを本当に紹介したり論じることにもなるのではないのか。もちろん、単純化は避けなければならない。批判をするとしても内在的でなくてはならない。AやBやCにはそれぞれいいところも悪いところもあるだろう。だが繰り返すように、その両面／功罪／長所短所をみた上での自分の総合的判断が、実はAやBやCの本当の積極性／欠点を記述するときに必要な基準となるのである。

新靈性運動の本質把握には社会改革との関係が重要

この不満をもう少し具体化しよう。島園 [1996] は400ページ弱とかなり分厚い著作であるが、本文最終ページによろやく「新靈性運動がエコロジーや人権や社会正義など、現代的な社会倫理に対する意識を強めていく可能性がないわけではない（例え

16) 以上の記述方法については、島園[1996]の「はじめに」と「あとがき」で島園氏が自ら述べている。

ば欧米の緑の党はそうした可能性をはらんでいる)。その場合には、新靈性運動のある種の勢力が、ある種の救済宗教勢力と連合しつつ、政治経済的により公正で非抑圧的なグローバル社会に向けて、治癒的な影響力をもつことも、考えられないことではない」という記述が出てくるのである。だが、その評価に関わる本質的に重要な点が、最後に付け足しのように「可能性がないわけではない」、「考えられないことではない」と曖昧に記述されるとはどういうことであろうか。これは島藺氏の分析視点において、この点（人権やエコロジーなどの社会性）が重要でなかったことの現われといえないであろうか。

私が自分の立場を示して分析すべきというのは、ここを指しているのである。「可能性がないわけではない」などと曖昧な、いかにも「学者的傍観者の客観主義」の表現をして終わるのでなく、どういう要素／要因があれば、「その社会正義の可能性が実現するのか」、「それは本当に現実化するのか」を具体的に言うべきであると思われる。それこそ、新靈性運動の本質／性質をつかむ作業なのではないか。口先だけなら、ドイツ・ファシズムも日本軍国主義も、既成宗教（新宗教）も、オウム真理教も、近代主義も、各政党も、美辞麗句を繰り返してきたではないか。一般論でなく、新靈性運動の実際の影響や実態を見るべきである（そこと結びつけた深い理論的分析をすべきである）。一般的な言葉を言うだけでは、まさに新靈性運動の弱さを引き継ぐだけである。

私の評価は、「公正で非抑圧的な社会に向けて影響力をもてる」には、なにがいののかを考えないまま、自閉的に修行や瞑想に逃げているところに、新靈性運動の本質的特徴／欠点があるというものである。フェミニズム一つに対してもほとんどの新靈性運動はまったく無理解であり、これらが新靈性運動の本質的欠陥である。したがって私は総体としての新靈性運動に基本的に期待をもてない。「緑の党」を希望のように言う記述はその本ではここで初めて出てきたし、ここまで新靈性運動が反原発運動とどう関わっているかひとつ述べていない。理論上でさえ、環境保護運動と新靈性運動の主張がどのようにかみ合い、どこで齟齬があるのか検討されていない。同書ではそんなことにはほとんど関心が向けられないのである。同じく、「人権」というなら実際のフェミニズム等との関係を分析すべきであるが、それはまったく重視されていない。

私には、「人間の解放」「自然との共生」とは、何より、職場の性差別をどうするのか、離婚後の養育費や親権をどうするのか、原発をどうするのか、環境政策をどうするのかといった大事な点で評価されるものである¹⁷⁾。身近なレベルにおいても、具体的に力を奪われた人、傷つけられた人が支えられるような実践に結びつかねばならな

い。過労死するような長時間労働実態を放置しておいて、自然との共生でもあるまい。

一般論はオヤジの学者だけで十分だ。新靈性運動が、現代に危機感を持つなら、それは、終末とか、苦悩一般、環境破壊一般、「進化」や「公正な明るい社会」「苦しみからの解放」一般でなく、具体的な人権や環境の問題への身体性を伴った反発、それに基づく深く具体的な提起と実践でなくてはならない。それに鈍感なものが、「政治なんて」と言っただけで「修行や瞑想」に励むとすれば、そんな新靈性運動は、本質的にかなりつまらないものだというべきであろう。

ディープ・エコロジーなどへの批判を踏まえる

自然の摂理に畏敬・尊敬の念をもつこと、生かされていることそれ自体に感謝すること、などは世界（各宗教、歴史）に共通した「いい発想」だと思う。自然との調和をめざすことを野蛮、未開、幼稚、非合理とみなすのが間違いであることは今や明らかだ。自然の「靈性」にふれるというようなことを感性と知性の基礎としている人々がいることは、希望である。石牟礼道子さんが「石にも木にも心がある、命のないものはない」といい、そのままざしで世界を見ることには、学ぶべきものしかない¹⁸⁾。

こうした世界の良心の積み重ねを、エコロジーにそくして哲学的理念的にまとめ上げる動きが、「ディープ・エコロジー」、「エコフィロソフィ」である。「浅いエコロジー」が、資源効率、人口抑制など、技術レベル、狭義の「科学」レベルに限定された議論であるのに対し、「深いエコロジー」は、哲学的、宗教的側面まで含む。提唱内容のポイントは、「自己感覚の拡張、自己同化（環境は私の舞台ではなく、私そのもの）、自己と他者の連続面の強調、すべての存在は価値（本来的価値）があると知ること、多様性自体が価値とすること、人間は生存にどうしても必要な場合以外、この豊かさや多様性を傷つける権利はないとすること、人間の繁栄と人口削減は両立可能であること、人間の環境破壊は行き過ぎていること、生活の量的発展でなく質の見直しをみること、できる範囲での行動をすること」などにある。

このディープ・エコロジーに似たような動きや言説は、上述したような新靈性運動関連として、今ちまたに溢れている。その言葉・指向には賛成できるところも多いが、

-
- 17) すなわち、新靈性運動がまともなものになるには、シングル単位論のようなものが不可欠であるという私の主張になっていく。
- 18) 花崎氏は、海や山の「靈性」にふれた、それを感性と知性の基礎としている人々として、田中正造、石牟礼道子、宮沢賢治、金芝河、水俣病患者、三里塚反対運動、アイヌ民族の人々を紹介した。花崎 [1996] 180-184ページ。

よくみるとそこには、玉（すばらしいもの）も石（つまらないもの）もあることはまちがいない。森岡正博氏は、『生命観を問いなおす』（森岡[1994]）で、今までのこの種の議論の底の浅さを批判している。特に、ディープ・エコロジーや生命主義などの多くの言説にある、ロマン主義（自然や生命賛歌、リサイクル主義、エコナショナリズム、森の文化論、癒しの商品消費などの安易な希望論）を批判している¹⁹⁾。それは、きれいな言葉を唱えるだけで、今のシステムのうえでは、消費されるだけの、共犯関係のものであり、資本主義という今の社会経済システムを何も変えないものだというのである。同時に、「技術テクノロジー、近代社会が悪い」という「外部に敵があるというスタイル」がまちがいだという。もっともな指摘だ。

その上で、生命や自然自体に、人間という生命自体に、生に執着するエゴがあるとて、そこをみなくてはならないとする。当事者が同意すれば（あるいは善意の行為という主観があれば）何でもしてもいい、何でも利用すればいいというものではない。そういう意味で人間の部品視を批判する。敵は、自分たち自身のなかに、快樂追求の生命自体にあるという提起である。

外部にあるものを貪欲に何でも利用しようとする運動がシステム化された資本主義システム自体（科学技術文明と社会システムが、人間の本性と共犯関係）を批判しつつ、人間の欲望自体に自然破壊的などころがあることを認めて、人間を部品視、物質視する事を前提としてなり立つ、欲望従属の大量消費社会システムを補強しないという方向、人間の執着を拡大するものに反対する方向をめざすというのは、〈スピ・シン主義〉として僕が追求したいバランスにとても近く、正しい指摘とおもう。

宮崎駿氏も同じようなところに至っている（宮崎駿 [1995] 『風の谷のナウシカ』）。また、花崎氏も、少し違う角度からであるが、ディープ・エコロジーなどにしばしば見られる、体験を恣意的に意味付けする独断論、予言や神秘めかしたイデオロギーの傾向を批判する（花崎 [1994]）。いずれももっともな批判視点である。

また、「貴重な動植物や美しい森林」を守ることばかりに専念してきた従来の環境保護運動主流に対し、「環境とは私たちが暮らし、働く場所そのものだ。人間も母な

19) ここで森岡氏が批判する「ロマン主義」とは、自然や生命賛歌、近代の二元論を克服して自然と一体になろう、リサイクルしよう（その結果の新たな南北主義）、東西の対決（東洋古来の知恵を生かしてという、陳腐な西洋批判、エコナショナリズム）、森の文化を思い出そう（都会に住みながら）、ガイアの声を聞こう、人間非中心主義、生命との共存、調和と安らぎの世界が訪れる、自分たちの考え方さえ変えればいいのだ、命と母と地球は一体、命に目覚めて癒されよう、商品を消費して心の罪悪感を癒そう、等々の考え方のことであり、具体的な制度との闘いや問題の困難さの直視よりも、きれいな一般的文句を唱えれば何とかなると信じるような樂觀主義的安易さがあるものこと。

る地球の一部であり、守られるべき環境だ」というように「環境」を再定義し、貧困や経済格差を環境問題として取り上げるべきとする見方²⁰⁾も、米国でひろがりつつある。有害廃棄物処理施設が非白人地域に集中しているという「環境差別（環境レイシズム）」問題が、米国でも取り上げられつつあり、人種・階層間の「不均衡な健康被害」を解消することを目指す「環境的公正政策」がクリントン政権下である程度進められた²¹⁾。マイノリティの人々による、従来の白人中産階級中心の運動への批判の文脈で、エコロジー運動の射程の拡大が進んでいるのである。自然との調和問題についても、〈スピ・シン主義〉は、こうした流れの中でこそ考えられなくてはならないと考えるものである。

3 オメラスから歩みさる〈スピ・シン主義〉

政治的な位置

〈スピ・シン主義〉は、政治的側面を考慮するとどのような位置にあるのだろうか。先に4分類（近代合理主義、宗教、ポストモダニズム、新霊性運動）を提示したが、私はそれをふまえて、自説の〈スピ・シン主義〉の政治的位置を明らかにしたいとおもう。

福祉国家の類型論における代表格である、「権力資源」に注目した分類では、社会民主主義（北欧等）、自由主義（米国、カナダ等）、保守主義（ドイツ、オランダ等）、急進主義（英国、オーストラリア等）の4類型があるが、これは労働運動のパワーや社会政策の特徴を重視した上での近代主義国家の分類であった（先進資本主義国以外では、社会主義型や途上国型、宗教重視型もある）。この分類では〈スピ・シン主義〉は社会民主主義国家路線に近いといえる。

だが、国家や政治路線の分類は、何を分類基準とするかで多様な線引きが可能である。本稿では、私が21世紀を展望する上で大切とおもわれる点をふまえて、上記の哲学的・思想的な位置を反映した私なりの分類を提示したいとおもう。すなわち、近代主義の枠内か、枠外のポストモダニズムかという基準と、人権重視か市場エゴイズム（個人競争）重視かという基準でわけたい。そこに宗教的路線も付け加えたい（図表-4）。

20) リチャード・ムーア氏を代表とする「環境と経済的公正のための南西ネットワーク」の考え方。『朝日新聞』1999年2月19日。

21) クリントン大統領による「環境的公正のための大統領令」（1994年）は、あらゆる政府事業や連邦政府からの助成を受ける事業において、人種・階層間の不均衡な健康被害をもたらさないように求めている。環境レイシズムについては、本田、デアンジェリス[2000]が詳しい。

図表－4 21世紀の政治的路線の類型

近代主義か否か	主要な価値	代表的国家（路線）
近代主義 （共同体重視）	市場エゴイズム 人権重視 宗教重視 資本主義化 （高度成長）	①新自由主義，ナショナリズム（米国） ②社会民主主義（狭義シングル単位論）（北欧） ③宗教的保守主義，（イスラム国家） ④近代化国家（途上国の資本主義化） 高度成長対応・家族単位型（日本）
広義ポストモダン （個人重視）	市場エゴイズム 人権重視 宗教重視	⑤市場依存型（西欧現実）路線 （制度と市場の折衷， 狭義のポストモダン路線，宮台路線） ⑥シングル単位の社会民主主義， 〈スピ・シン主義〉 ⑦新靈性運動的政治

近代主義的政治

まず、モダニズム（近代主義）は、伝統組織＝共同体重視の政治といえよう。近代主義が作り上げた、何らかの「共同体」の神話性への根源的批判（相対性の自覚）がない段階なので、共同体という物語の力を利用する政治となる。その中には、エゴ重視／個人競争重視の市場中心主義、新自由主義型の政治路線（小さな政府路線）(①)がある。ここでの共同体重視とは、国家や伝統的家族や民族の強調につながるので、ナショナリズムの志向、マイノリティの人権否定志向となる²²⁾。新保守主義は、広義の福祉国家における、この先祖帰り／単純路線／右翼路線の強い自覚に他ならない。

それに対して、近代主義の枠内での人権重視の路線、すなわち社会民主主義路線(②)がある。ここでの共同体重視とは、少数派を含む社会的連帯や労働組合組織の重視の意味であるので、労働者を中心とした福祉国家の拡大路線（大きな政府路線）となる。基本的にこの福祉重視路線は、高度成長期の経済成長を基盤にしているので、低成長期には、何らかの修正が迫られる。それがこの枠内のもの(②)か、脱近代化にまでいたるかによって、後述する⑥との違いとなる。

その他、近代主義の枠内でありながら、宗教性を重視する路線(③)もみておく必要がある。典型はイスラム国家であるが、その他の宗教も近代主義国家の枠組みと共

22) 日の丸・君が代などにこだわる、昨今の日本の風潮（文部科学省の指導！）は、ポストモダンなどまったく考慮しない「近代主義のオヤジたち」に日本が牛耳られている段階であることの、恥ずかしい一例に過ぎない。

存の道を選んできた。上記の自由主義ナショナリズムと、宗教的保守主義は親和的である点も忘れてはならない。ここでの共同体とは、宗教的枠組みが前提とする家族や宗教的地域共同体（宗教団体、教区など）である。世界的な社会経済状況が混乱を極め暗黒暴力社会化が進む中で、先進国の成功を得られない後発国において精神性重視の気分を反映して、この宗教的路線も力を持ちつづけるであろう。

また、世界システムは搾取し続けるために第3世界を構造的に存続させるので、そこにおける成り上がり指向＝近代化国家路線（④）も当然存続することになる。これの亜流が、大量生産・大量消費型、高度成長対応で、性差別（家族単位）を組み込んだ型の資本主義システムで、日本がその例である。

以上の近代主義の4路線に対して、私は基本的に「反対」である。それは、社会経済構造の変化に対して、鈍感（近代という特殊性の無自覚）か、あるいは先祖帰りしようとする「無理」があるからである。展望も希望も感じられない。しかし、政治は現実的な力であるので、なんらかの〈共同体〉という幻想にすぎない熱狂の力を基礎とした力技の結果として、21世紀でも当面、この近代主義の枠内の路線が存続しつづけるであろう。

ポストモダニズム的政治

それに対して、私が、社会経済構造の変化を反映した政治路線と考えるものが、広義のポストモダニズム的政治である。これは、近代主義の共同体（共同幻想）の崩壊——限界の自覚——をふまえて、近代の枠組みから離れるような自由な〈個人〉を重視する政治といえる。この路線はいまだ、政治的な国家スタイルとして明確には出現していない（ポストモダンという意味で、一国主義の枠を超える志向あり）。その方向での動きがあるだけである。しかし、明らかに、近代主義の枠内にとどまらない政治が求められているし、その方向への試行がすすんでいる。

まず、人権を軽視してエゴイズムの風潮を許容する市場依存型路線（無秩序的路線）（⑤）があるとおもう。社会全体が相互無関心になり、制度的な人権重視を減らし、弱肉強食の風潮が蔓延するが、何らかの近代的共同体を志向するような〈熱狂的〉なものにたいして冷徹なスタイルの政治体制であると思う。西欧先進国では、福祉の後退のなかで、しかし一定の福祉を制度的に保障し、近代主義的な極右・新保守主義・ナショナリズムの路線を拒否しながらの、個人主義の道——西欧現実路線（制度と市場の折衷路線）——がありうると思う。狭義のポストモダン思想に対応したシステムとも言える。そして、宮台真司氏の路線も、政治的には、ここの亜流として分類できると思う。

次に、個人を重視するが、それがエゴイズム的でなく、人権（社会的連帯）を重視しながらのものである路線（⑥）がある。社会民主主義的な枠組みをベースとしたシングル単位型の政治体制志向の路線であり、北欧とくにスウェーデンがこれに最も近い。スウェーデンは、いまは近代主義国家の枠内にあるが、個人単位制度を整え続けているので、その方向に進みつつあるといえる²³⁾。そして、〈スピ・シン主義〉は、このポストモダンにおける社会民主主義・福祉追求・人権重視路線の、ひとつであると位置づけることができる。ポストモダニズムかつシングル単位という意味で、個人重視ではあるが、〈スピリチュアリティ〉の視座をもって新しい連帯（新しい人権論の水準）を追求するので、その意味では、社会民主主義的相互支援の高度なポストモダン段階の政治形態なのである。

最後に、近代の〈共同体的熱狂〉よりも個人意識に重点が移っているという意味でポストモダニズム的であるが、宗教性を重視しつつ政治的連帯に無関心、既成宗教にも批判的という意味で、上記の2路線と異なる路線、すなわち新靈性運動的政治路線（⑦）もありうるといえよう。これが国家まで含む政治的な完成形をもつとは今のところ想像し難いが、新宗教（新新宗教）が一定の地域で信者を中心に共同体的営為を行いうるようになり、近代主義内の宗教路線と近似的かつ、既成宗教とは異なるときに、ひとつの政治勢力となりうると考えられる。21世紀型のファシズムがあるとすれば、そうした新靈性運動的洗脳と絡めて出てくるであろう。

結論は、私は、以上の7路線のうち、⑥の路線、つまり個人を重視するポストモダンかつ〈スピリチュアリティ〉も含めて人間の連帯を重視する政治路線を支持したいと思っている。〈スピ・シン主義〉とは、近代主義でも、エゴイズムでも、新靈性運動でもない、そうした独特の位置にある。逆に言えば、〈スピ・シン主義〉以外の6

23) 拙稿[1999]「スウェーデンの男女平等」論文参照。なお、社会民主主義的福祉国家路線には、70年代から繰り返し「破綻する」、「官僚主義」、「勤労意欲低下」等との批判がある。しかし、スウェーデンをみればわかるように、その絶対的水準はいまだ非常に高い。7つの政治路線は、いずれも財政的困難等をかかえつつも、長所と欠点をもっており、21世紀も存続する可能性をもっている。北欧では、ノーマライゼーションの理念は今も生きている。デンマークで生まれ、スウェーデン人ベクト・ニーリエが整理したノーマライゼーションの概念（8つの原理）とは、1日と1週間と1年の普通のリズムと経験の保障、男女両性の世界での生活の保証、当たり前前の収入と当たり前前の住環境水準の保障、自己決定と尊厳の保障である。この観点から見て、日本は「北欧の40年前、米国の30年前」（1998年秋に来日したニーリエ氏の言葉：『朝日新聞』98年12月28日）でしかない。この評価への批判ももちろんあるが、私はニーリエ氏の評価を支持する。少なくとも、社会民主主義的福祉国家路線を時代遅れとみなす、根拠なき古色蒼然たる「偏見」を繰り返すのは無知以外のなにものでもない。

つの路線も含めて、21世紀はこの7つの路線の共存と闘争の時代であるといえると思う。

オメラスから歩み去るか否か

完璧に幸福で平和で自由に喜びに満ちた街、オメラスがある。信じられないというかもしれないが実際にあるのである。ただし、それが維持されるためには厳格な契約があった。一人の子どもが絶対的に不幸で惨めで悲惨でなくてはならないのである。子どもは地下室に閉じ込められていた。最初それを知った人々は悲しみ苦しむが、絶対多数の幸福がもたらされていること、その子をもはや助けてもそれほどその子は幸せにはならないだろうということを考え、やがて現実を受け入れていき涙も乾いていく。それは必要なのだと。だが、ほんの少数だが、オメラスの街をひとりひっそりと出ていく者たちがいるという。街の外がどうなっているのかも、その後の彼らの消息も分からない。オメラスから歩み去る人々がいることだけがわかっている。

『オメラスから歩み去る人々』²⁴⁾はそんな物語である。これは、ル＝グウィンがウィリアム・ジェームズの『道徳哲学者と道徳哲学』の次の部分から立ちあげた物語である。

「それとも、もし、フーリエやベラミーやモリスのユートピアをはるかに凌ぐような世界、幾百万もの人々が永久の幸福を保ちうる世界が、ただ一つ的前提、この世界の遠いはずれにいる一人の迷える魂が、孤独な苦しみ of 生涯を送らなくてはならないという、ただそれだけの条件で我々の前に差し出されたとしよう。そこで我々が直ちに味わう、この特殊で自主的な感情は、いったいなんだろうか？ さしだされた幸福を掴み取りたい衝動が心の中に湧き起こりはするが、なおかつ、そうした契約の結果であるのを承知の上で幸福を受け取り、それを楽しむのが、いかにおぞましいことかと我々にさとらせるこの感情は？」

〈スピリチュアル・シングル主義〉の概念は、ここに関わる概念である。人によると、たった一人の犠牲、しかももはや改善不可能な、現に存在している犠牲とすれば、現実的・政治的判断としてこの契約を受け入れればよいと考えるだろう。無邪気な理想論でなく、現実的な「実」をとることこそ「大人」なのだと。実際の現実社会は実はこれに近い。

24) ル＝グウィン[1980]所収。

しかし、ジェームズやル＝グウィンが「おぞましい」とおもう感覚が私にもある。私は、「オメラスから歩み去る人」になるしかないと考えるタイプである。あなたはどうか？ 「オメラスから歩み去るか否か」という選択（行動）を一人一人に突きつけ、そのなかで孤独を抱えてでも歩み去る人々がいることに希望を託すのが、〈スピ・シン主義〉である。これは「唯一の正解」ではない。生き方の原則、最も根っこに何を置くかという「自分にとっての原則」の問題である。

社会基盤の変化の反映

〈スピ・シン主義〉は、社会基盤の変化を反映している。豊かな社会になり、物質的には恵まれるが、消費が過剰拡大し、旧来型「福祉国家」が行き詰まり、もはや近代化（高度成長）という共通目標を共有できない時代であるからこそ、成長前提のシステムに歪みが生じ、人間関係がギスギスし、物質主義の悪い面が浮き彫りになってくるのである。そうした時、世界システムや経済・社会の仕組みを含めて、広く現実を捉えるならば、〈スピリチュアリティ〉の問題にも行き当たらざるを得ない。世界的には一向になくならない紛争や戦争、南北間経済格差²⁵⁾、先進国の社会的行き詰まり、特に日本のように経済ばかりで文化的精神的豊かさを置き去りにしてきた国での行き詰まり（危機感のなさ）が、矛盾を拡大させ、こうした「次」を求める意識・うねりを拡大させるのである²⁶⁾。

日本はずっと高度経済成長時代の精神——近代化によって大量生産大量消費主義的先進国になろうというメンタリティ——でやってきた。経済も政治も教育もみな、その時代のままだ。だからそれと対峙してきた「反体制側、人権擁護側の運動」も、その多くは近代化志向のままで、今では時代遅れのものになっている。左翼も、労働運動も、その他の民主主義指向の運動も、多くは能力主義、効率主義、権威主義や近代

25) 1998年ユニセフ（国連児童基金）報告によると、世界では過去10年間に200万人の子どもが紛争で殺され、600万人が重傷を負った。18歳未満の子どもたち30万人が今も戦闘に駆り出されている。しかし日本にはこの現実への危機感がない。

26) 時代が新しい感覚の段階（〈スピリチュアリティ〉重視、正義の重視）に移行していることは、情報公開の進展、自然環境保護の動き等の他に、ピノチェト元チリ大統領の免責権を認めずに軍事政権の虐殺・拷問を国境を越えて問おうとする動きが拡大したことにもあらわれている。少し前の時代なら（そして当然今の日本の政治でも）「現実の政治」と「国家主権の尊重、法の遵守」の名のもと、国家間の政府の取り引きでことはすんでいたはずである。ピノチェト逮捕が有効と英国上院が決定したニュース（1998年11月25日）は世界に希望の光が輝いた日であった。中国のチベット弾圧問題でも、インドネシア腐敗政権でも、従軍慰安婦問題でも、日本政府・自民党政権は常に「現実の政治」しかみようとしない。〈スピリチュアリティ〉のかけらもない、愚かな人々である。

的価値（古い水準での人権や平和提唱）に捕らわれてきた。つまり、今までは日本中で、〈スピリチュアリティ〉が軽視されてきたのだ。もちろん、無意識のうちにそれが指向されていたということはある。家庭で、運動内で、宗教内で、政治で、学問で…。しかし、それは決して主流として目にみえるものとはならなかったし、重視されてこなかった。

システムの変化を目指すもの

これからは、〈スピ・シン主義〉のようなことを志向する人が、今よりは増えていく時代だと予測できる（すぐに多数派になると予測しているわけではない）。願望ではなく、それが時代の変化（社会基盤の変化・矛盾）を反映しているからだ。だから、〈スピ・シン主義〉は、単なる「意識の上だけの变化を訴える観念論」ではない。社会の土台を作り替えようという制度と意識の全体を変えていく動きであり、その基盤にはこれまでのシステムの行き詰まりと、それにたいして反発・発生してきた「新しい芽」（国家や市場の限界を意識した利他的・公益的志向）がある。単なる意識上の変化ではなく、世界に対する認識の変化、イデオロギー上の枠組みの変化であり、社会の変化の写し鏡なのだ。

観念論は、社会のシステムを不問にしたままで、意識上だけの变化を扱うが、〈スピ・シン主義〉はそうではない。「観念論ではない」というのは、社会システムの矛盾に基づく変化であり、社会システムを変えようとする考えであり、変革するときの物質的な力になるという意味である。合理的な姿勢とは、精神の問題をシステムの問題と結び付けるものである。優しい気持ちやスピリチュアルな視点というときも、私は、労働時間を短くすること、不当な扱いに対しては労働組合やオンブズ制度などを通じてちゃんとチェックをできることといった北欧諸国のような社会民主主義的システム作りが絶対必要とおもっている。その意味で、制度論＝シングル単位論を手放せないからこそ、〈スピ・シン主義〉なのである。

〈スピリチュアリティ〉を大事にする運動へ

しかし「北欧諸国のような仕組みを作れば完璧か」というと、もちろんそんなことはない。完璧な社会はない。北欧にもまた問題がある。そしてその将来は、世界の暗さそのものである。その問題に対処するためには、シングル単位論概念の強調とともに、〈スピリチュアリティ〉概念が重要だと思う。そしてそもそも、日本を北欧社会のようにするというときには、スピリチュアルな視点と結びついたシングル単位的運動が必要なのだ。〈スピ・シン主義〉は、社会運動の仕方に影響を与えるものである。

運動のなかで何を大事にするかを示すものである。今の運動のマイナス点を批判するものであり、今の社会にも存在している「かなりいい動き」の本質を顕在化するものである。これまでの人権擁護運動、民主派の運動の底には、〈スピリチュアリティ〉というようなものが多かれ少なかれ流れていた。そこを意識化し、今後の重要な対立点であると整理して、闘い方（目指すべき基本方向）を整えなおす時期であると思う。

今の日本では、人権や連帯といってもあまり説得力がない。古いイメージにまわりつかれてインパクトがなく、概念がくすんでしまっているからである。しかし、人権や連帯などは大事な概念である。そこを伝えるためには、「〈スピリチュアリティ〉を大事にする」というまとめ方が適切な段階になったと思う。若い人に、いや日本中の人に、知性万能合理主義の「乾いた冷たい」感じとは違う次元で、「暖かいハートが大事ちゃうんか」、「スピリチュアル度の低い生き方をしたくないやんか」ということを真正面から提起していくことが重要なのではないか。

政治家や官僚や会社人間のような、あんなかっこ悪い、汚い、つまらなさそうな生き方をしたくないという気分、適切な概念——「私はくたましい」を大事にしたいんだ——を与えることが必要と思う。そういう運動でなくては、自分にとっても魅力的でないじゃないかと思う。自分にとって、「これがとても大事で、面白くて、美しい」と思えるからこそ、それを人にも薦められるもの、そういうものとして、〈スピリチュアリティ〉というのはなかなかいい点をまとめている概念だとも思う。そしてそれは、自分の生活スタイルも、運動自体の性質も変えるような力（左派も含めた権威主義や自己陶酔的愚かさを減らす力など）をもっているのだ。

論理偏重がいけないのか

藤原新也氏は、次のようなことを言う。「人」にはそれぞれの人生があり、簡単には殺せないが、頭で理解した「ヒト」——テレビゲーム、CG画面の抽象化されたもの——には自分の身体に影響を及ぼさないから、殺人を抑制できないのだという。したがって、論理偏重をやめ、声、身体に近い言葉にしなければならないと。そして藤原氏と似たようなことをいう人は多い²⁷⁾。

言いたい気持ちは分かるが、しかし、それは一面的で足りない指摘だ。私はニュースで今日も軍隊や民兵が人を殴り、時には殺すシーンを見ている。相手は生きた人間である。いわゆる「途上国」では抽象化されたゲームなどまだ拡大していない。しか

27) 例えば『朝日新聞』1999年1月9日社説で、「理性を貴ぶあまり、いつのまにか人類は、感じることを一段下に見下すようになってしまったのではないか」という視点で、近年の子どもたちの事件や学究崩壊の背景に「ゆがみを生む理性偏重」があると分析する。

し人を殺す。相手を自分たちと同じ「民族」と思わなければ、相手を敵だと思えば、人はなんでも出来るのだ（ルワンダ、ボスニア、東チモールを思い出そう）。「論理／理性偏重がいけない」というのは、ロマン主義的結論すぎる。

人をなぜ殺してはいけないのかという子どもに、論理的に説明しようとする試みが十分に為されただろうか。その努力が大人にあったか。その努力をしてきたか。考えているか。近代オヤジの道徳論ではないかたちで、そうした根源的疑問に答えようと真剣に考えてきたか。教育において、生活に直結する諸問題対処能力をのばすような情報を与えたり、徹底的に論理的に考えさせたか。そこが大事なのではないのか。

論理の徹底などなされてこなかったのだ。これまでは、上記の通説とは逆に、論理偏重なのではなかった。今までは、高度成長等そのときそのときの政治経済状況を前提とした上で思考停止して、暗記と小手先技術偏重の教育をしてきただけなのだ。それを自覚し、信じてきたことの無根拠性に立ち向かい、相対化の能力を伸ばして、「答え」ではなく新しい問題に「答えなく関わる」という取り組みをすすめるべきではないのか。

そのようにポストモダンの押し寄せた上でこそ、心身を統一的に捉えるということ、心をうつような言葉、小さな声、無言、自然の小さなささやきというものが、積極的に位置づくはずである。論理的思考の深さをともなっていない直感的感情的なものなど、容易に左右に揺れ動き、いいかげんなイデオロギーに洗脳されやすく、カルトに騙され、ときには暴力的ナショナリズム、ファシズム的行動にさえつながるということを忘れるべきでない（テレビゲームがなかった戦前の軍国主義を思い出せばいい）。〈スピ・シン主義〉は、このように、片よることなく論理と直感（感性・感情）のバランスの大事さを追及する思想なのである。

なぜ人を殺してはいけないのか

なぜ人を殺してはいけないのか。それは、「当たり前だ」、「人間の道（道徳）に反しているからだ」というのでは、「現在の答え」になっていない。まず「その問いもアリだ」というところから出発するしかない。その上で、「殺してはいけない」のは、他者はあなたの所有物ではないから、あなたが自由にできるものではないという出発点をめぐって議論することが必要だろう。あなたも殺されるとすると、痛くて苦しくて、悔いが残り、もっと生きて楽しみたいと思うだろうと想像させる。殺人はもっと生きたいというおもいが他者によって断ち切られることだと改めて一から展開するしかない。他者がどうして人の生き死にを決める権利があるというのか。逆に相手にその理由を挙げるように促してみればいい。そうすれば、戦争しているとか、死刑があ

るとか、他の動植物のいのちを人は奪っているという答えがかえってくるだろう。では、そこから、戦争や死刑や食べることについて議論をしていけばいい。そこをちゃんと話せなくて、一体何がいえるというのか。

実際に自分が殺されることは、つらい。つらいことを自分にして欲しくないなら、相手にもしてはならない。だから拷問も、差別も、いじめもいけない（だから差別やいじめに鈍感な者、エゴイズムな生き方をしている者が、「人を殺してはいけない」ということには説得力がない）。

まずはこのあたりの原理から出発して、それを拡大する議論のなかで、本人が何かをつかむしかない、と思う。人を殺してはいけないのかという問いをあなたはなぜ発するのかと聞くことが必要である。「拡大」とは、「いけない」という禁止だけでなく、自分が何をしたいのかというプラスの方向を深めることである。そのとき、自分がどうしてもしたいと思うような楽しいこと（創造的、芸術的なこと）、人を喜ばせるというようなこと（他者、世界とのつながりの喜び）がでてくる。そうした〈自分の生きる意欲の自覚〉、すなわち〈スピリチュアリティ〉を基準としたとき、「人を殺すこと」がその〈逆〉であることに気づく。自分がなされてうれしいこと、自分が他者にできてうれしいことが見えてきてこそ、その〈逆〉がわかる。自己を肯定するエンパワメントの感覚があってこそ、その〈逆〉がわかる。

ここにいたってこそ、「人を殺す」ことが「自分のしたいこと」でなくなるのである。そして「殺すのがしたいことにならな」ってこそ、「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いを発する必要がなくなる。「問い」は従来のままの問い方を終える。この「問い」をもっていた過去の自分が見えてこそ、「答え」に自分でたどり着けるだろう。この「問い」への「答え」はここに至ってこそ、立ち現れる。

あちらとこちらのどちらがニンゲンにとって「良い」ことかというのが判断し難い矛盾についても、以上のポストモダンの＝〈スピ・シン主義〉的な思考をベースに考えを積み重ねていくしかない。そのときに、身体性ある考え方という視点も重要になってくるのであって、逆ではない。

（本稿は2003年度大阪経済大学特別研究費の成果の一部である。）

追記：本稿の脱稿後、遠山日出也氏から、私の〈スピリチュアル・シングル主義〉に対する詳細なご意見や批判点などをいただいた。十分に検討する価値のあるものであり、それを通じて〈スピ・シン主義〉もより洗練あるいは修正されるものと思われるが、今回は間に合わなかった。

指摘していただいた点の一部を紹介しておく、「スピリチュアリティ」概念を、新靈性運動とは逆に、各自の権利保障の全地球的・歴史的相互関連性を認識することや、科学・近代合理主義の積極面を発展させ、近代二分法自体を真に克服することという方向で質的に展開することが重要なのではないかという指摘、〈スピ・シン主義〉をいうなら、エコロジカル・フェミニズムの積極的評価がいるのではないかという指摘、〈スピ・シン主義〉は実践が重要といいつつ抽象論ないしは「心がけ」が多いのではという指摘、思想地図において、「個の権利保障」と「自己責任」を区別し、市場原理主義・新自由主義とシングル単位の区別を明確にすべきではないかという指摘、市場原理主義や新靈性運動といった新しい保守系の思想の危険性を示していないのではないかという指摘、同じく思想地図において新靈性運動をスピリチュアル度の高いものとみなすのは、新靈性運動が社会変革性が弱いので問題ではないかという指摘、スピリチュアル度とシングル単位度は統一的にとらえられるのではないかという指摘、狭義シングル単位と〈スピ・シン主義〉を思想地図上ではもっと近くにとらえるべきという指摘、ポストモダンでは、スピリチュアル度だけでなく、シングル単位度にも関わるはずであるという指摘、高度成長期を頂点とする「近代」と、性別分業=近代全体とを区別したらいいのではないかという指摘、思想地図上で〈スピ・シン主義〉を最も優れた思想とするのは問題なので、〈スピ・シン主義〉が目指す地点とすべきではないかという指摘、脱近代だけでなく、民主という軸でもみることで、不要な対立が解けて運動の連帯が進むのではないかという指摘、家内領域と公共領域のより高い段階での再統一が必要との指摘、拙著『スピ・シン主義宣言』での〈たましい〉概念の説明で、無意識領域とか外の〈たましい〉とのつながりなどをいうのは神秘主義的で問題ではないかという指摘、それよりも「これまで無意識領域として放置されてきた部分も含めて、自分の内面（自分というもの、心の奥底）を認識することが大切だ」としたほうがよいという指摘、〈たましい〉というよりも「誰もが、無意識の心の奥底では、大きなつながりを求めている部分がある」としたほうがいいのではという指摘、つながりを求める社会的根拠を明らかにしていく必要性の指摘、つながりを自覚するためにマルクス主義フェミニズムやエコロジカルフェミニズムの成果を取り入れるべきであるとの指摘、「上層建築」や「正論」の一面批判でなく、二面性をおさえた批判がいるとの指摘、などである。後日、これらの指摘を踏まえた議論を展開したいと考えている。拙著、拙稿をもっとも深く熟読していただいている遠山氏にはこの場を借りて感謝を申し上げたい。こうした議論を通じて、よりスピリチュアルな方向に共に進んでいけるものと感じている。

文 献

- ダライ・ラマ [1998] 『ダライ・ラマ、イエスを語る』中沢新一訳，角川書店
- 花崎皋平 [1996] 『個人／個人を超えるもの』岩波書店
- 本田雅和，風砂子・デアンジェリス [2000] 『環境レイシズム』解放出版社
- 伊田広行 [1999] 「スウェーデンの男女平等——その歴史，制度，課題」『大阪経大論集』50巻第1-2号
- [2001] 「フェミニズム戦略としてのシングル単位論」『女性労働研究』39号（ドメス出版）
- [2003a] 『スピリチュアル・シングル宣言』明石書店
- [2003b] 「くたましい」が存在する場所——「混沌の闇世界」という領域への気づき」『大阪経大論集』53巻第6号
- 井上ひさし，立花隆 [1998] 「二十世紀図書館」『文藝春秋』98年7月号
- 小杉泰 [1994] 『イスラームとは何か』講談社現代新書
- ル＝グイン，アーシュラ・K (Ursula K. Le Guin)
- [1980] 『風の十二方位』ハヤカワ文庫（[1975] *The Wind's Twelve Quarters*）
（「オメラスから歩み去る人々」（1973）所収）
- [1986] 『所有せざる人々』ハヤカワ文庫（[1974] *The Dispossessed*）
- [1990] 『世界の合言葉は森』ハヤカワ文庫（[1972] *The Word For World Is Forest*）
- [1992] 『夜の言葉：ファンタジー・SF論』岩波書店（1985年サンリオ社版の改訂版）（*The Language of The Night*, 1979, 1989）
- 宮崎駿 [1995] 『風の谷のナウシカ』徳間書店（ANIMAGE COMICS ワイド版 ①～⑦）
（原作：月刊『アニメージュ』82-94年連載）
- 森岡正博 [1994] 『生命観を問いなおす』ちくま新書
- 西田幾太郎 [1911] 『善の研究』岩波文庫
- 島蘭進 [1996] 『精神世界のゆくえ：現代世界と新靈性運動』東京堂出版
- 上野千鶴子 [1998] 『ナショナリズムとジェンダー』青土社
- 鷲田小彌太 [1993] 『現代思想キイ・ワード辞典』三一新書
- 吉田敦彦 [1999] 『ホリスティック教育論』日本評論社